

南のひと 28

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



石原孝子（いしはら たかこ）さんは、旦那さんの和義（かずよし）さんと一緒に西表島で『農家民宿 マナ』を営んでいる。孝子さんと私は、同じころ八重山に移り住んだ。今から約20年前になる。孝子さんとは、深い話をするような仲ではなかったけれど、同じ時期に八重山に移り住み、共に八重山の離島暮らしの時間を共有して来た同志のような仲だ。

そして、孝子さんは、私にとってのターニングポイントのきっかけを作ってくれた人でもある。2016年の春に、「八重山毎日新聞の日曜随筆を書いてみたい？」と孝子さんから電話があった。

それまで私は人に読んでもらうような文を書いたことが無く、ましてや新聞に自分の書いた文が掲載されるような経験もしたことがなかった。もしこの話がこの年の春ではなく、もっと前の年だったなら、私は断っていたと思う。たまたまその年の初めに自分に課していた課題が、訪れる仕事の話は断らずにチャレンジしてやり遂げる、というものだった。一歩踏み出すのにいつも躊躇して決断するのに時間がかかりすぎる自分を変えたかったのだ。もしあの時に孝子さんからのお話を拒んでいたならば、今のような仕事のスタイルや、人々との出会いや繋がりには至っていなかったと思う。以来、孝子さんには感謝の気持ちを伝えたいとずっと思っていた。

先日、娘を連れて初めて『農家民宿 マナ』に一泊泊りに行ってきた。何よりも島の食材を使った体に優しく美味しい料理が楽しみだったのだが、期待を上回る滞在となった。赤瓦の家を一軒丸ごと借り、自由に弾けるピアノがあり、中庭には大きなガジュマルの木からブランコが下がり、夕方や明け方の散歩はシイラ川を眺めながら西表島の大自然に心奪われ、孝子さんと和義さんの農業の話や猪狩の話に圧倒され、たった一泊なのに素晴らしい旅をした感覚を味わうことができた。

「八重山の島々は海に隔たれ離れ離れだけれど心は繋がっているよ」というような言い方を島人は時折する。旅から帰った数日後、夕焼けに染まるコンドイ浜から西表島を眺めながらふっとそんな事を思った。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。